

世紀転換期におけるマイノリティーの言語教育と文化伝承に関する研究  
 - 中国北方地域の無文字少数民族を中心に -

The study on language education and cultural inheritance of the  
 minority in an era of change and transformation

竹田 治美  
 Harumi Takeda

要旨 (Abstract)

本論の目的は、民族言語と伝統文化が消滅の危機に迫られている中国内モンゴル自治区の最北端にあるフルンボイル（呼倫貝爾）地区における人口の少ない、文字を持たない民族、エヴェンキ族（鄂温克族）の学校教育、家庭教育と母語教育の全体像をフィールド調査し、同時に社会的・文化的背景とともに考察することにある。自民族の文字を有しない少人口民族の母語喪失の実態を通して、彼らが社会と経済、価値観が大きく変動していく中国社会においてどのような適応を遂げていくのか、その文化の伝達、アイデンティティーはどのように構築していくのかを明らかにすることにある。

キーワード：(マイノリティーの言語教育) (少数民族文化伝承) (無文字少数民族)

1. はじめに

世界には、現在約7,000種類の言語が存在していると言われている。その約半数は話者数が6,000人以下（いわゆる少数民族語）の言語である。その中には、話者がごくわずかしかなかったり残っていない言語もおよそ450種類あると言われている。これらの言語は政治経済的・文化的に優勢な言語に圧倒されたり、または優勢的な環境の言語に影響を受けたり、その結果、稀少言語が急速に消滅の危機に迫られている。これらの言語を「危機言語」と称する。「危機言語」とは、存在自体が消滅の危機に瀕している諸言語のことである。<sup>1)</sup>

本研究の目的は、民族言語と伝統文化が消滅の危機に迫られている中国内モンゴル自治区の最北端にあるフルンボイル（呼倫貝爾）地区における人口の少ない、文字を持たない民族、エヴェンキ族（鄂温克族）、オロチョン族（鄂倫春族）、ダウール族（達斡爾族）の学校教育、家庭教育と母語教育の全体像をフィールド調査し、同時に社会的・文化的背景とともに考察することにある。さらにその変容を明らかにしながら、エスニック・マイノリティーにおける民族文化の伝承・断絶といった実態を教育学の観点から実証的に総合検証することにある。

特に、近代教育を受けてきた少数民族の子どもに焦点をあて、学校教育を受けることにもなう家庭教育、進学、就職、民族移動、社会移動などの変容の実態を検証する。そして民族文化の継承がどのようになされるのか、ある

<sup>1)</sup> 日本言語学会 危機言語のページ <http://www.fl.reitaku-u.ac.jp/> (2017年12月閲覧)

いは断絶しているのかを明らかにするとともに、その民族の生活と価値観の変容、文化伝達および子どものアイデンティティの形成について考察することである。

本研究は、フィールド調査を通して少数民族の子ども及び家族を含めた生活実態を考察する。さらに自民族の文字を有しない少人口民族の母語喪失の実態を通して、彼らが社会と経済、価値観が大きく変動していく中国社会においてどのような適応を遂げていくのか、その文化の伝達、アイデンティティはどのように構築していくのかを明らかにしたい。今回の少数民族の調査を通して、マイノリティーの年少者の母語教育の可能性と民族アイデンティティの構築の実践を考えるうえで参考としたい。

筆者は、幼少期から約16年間呼倫貝爾地区（Hulunbuir）で生活しており、そのため、本論のオリジナリティは筆者の視点にある。2017年8月に筆者は呼倫貝爾市で子どもたちや家族、教員などと懇談する機会があり、彼らから忌憚のない本音を聞くことができた。「民族文化を伝承していきたい。狩猟民族が自己文化を喪失したら、その民族のすべてが失われることになる。民族の消滅に直面することになる。」と緊迫感を持ち訴えた人もいる。一方、情勢の変化に対してなすすべがないと思う人もいる。さらには人口が減少していく中、今後の人材育成のあり方が課題となる。関係者たちは、グローバルに生きるには、多くの外部の力を借りるしかないと考えている。また、文化継承の力になるものは教育であると切実に思っている。

エヴェンキ族（鄂温克族）、オロチョン族（鄂倫春族）、ダウール族（達斡爾族）「以下漢字で示す」は、僅か50年間で原始的な生活から現代的な生活に転向した。民族文化の衰退が顕著にみられる。しかし、千人単位、万人単位の弱小民族がどのように民族消滅危機に対処できるか。都市部から離れた辺境地域の弱小民族にも目を向ける必要がある。今回の調査対象になる民族の人口は、鄂温克族は3万2千人（2013年調査）、鄂倫春族約8千人、達斡爾族約13万2千人である。<sup>2)</sup>

本論は、鄂温克族の言語構造の変容と言語教育に関する一部の調査を初回の考察として報告する。

## 2. 鄂温克族について

### 2.1 歴史背景について

中国の少数民族は、国民の92%を占める漢民族以外に55民族が分類されている。そのうち21民族が30種類の文字を有している。少数民族には、各自の言語、文化を維持する権利が保証され、特に各少数民族語を教授言語とする初等中等教育が原則保証されているが、しかし、実際では経済と教育などにおいて人口数の多さによる格差、文字の有無による格差が大きいとみられている。

急速に経済が発展する呼倫貝爾地区において、都市化・市場経済化などによって、生産方式、生活様式、社会形態が大きく変容し、かつての遊牧民族、狩猟民族の思想観念も大きく変化した。

今回の調査対象は鄂温克族（中国語 Ewenke）、「エヴェンキ（ロシア語 Э в е н к и (Evenki)）を中心とするものである。

鄂温克族はツングース系民族の一つであり、主に中国興安嶺山脈周辺の内モンゴル自治区呼倫貝爾市の鄂温克族自治旗と黒竜江省などに居住している。その他、ロシア国内のクラスノヤルスク地方やモンゴル人民共和国などにも居住している。

鄂温克族が居住している呼倫貝爾市は内モンゴル自治区の最北東部に位置する地級市である。市名はモンゴル語

<sup>2)</sup> 内モンゴル自治区地方志編纂委員オフェス内モンゴル自治区情勢（2016）

で、地区に含まれる湖であるフルン湖（呼倫湖）とボイル湖（貝爾湖）に由来する。東西 630 キロメートル、南北 700 キロメートル、総面積 253,000 平方キロメートルで、人口約 2,650,000 人（2016年）である。<sup>3)</sup>

呼倫貝爾市は中国の最も北東部にある都市で満州里という中国最大の陸運交易港がある。北部および北西部にはアルゲン川を境界としてロシア連邦、西部と西南部はモンゴル国と接する。現在呼倫貝爾市に31少数民族が居住しており、主に漢民族、モンゴル族、ダ達斡爾族（Daur）、鄂倫春族（Oroqen）、満族、回族、朝鮮族が大半を示している。

鄂温克族は歴史上ツングース部族、ソロン部族、エヴェンキシロ部族三つに分かれ、主な生業は狩猟とトナカイの遊牧であった。かつて鄂倫春族は狩猟をしながら遊牧していたが、現在は定住化が進んでおり、遊牧、農業、観光業、加工業、貿易などにも携わっている。また、鄂倫春族はシャーマニズムを信仰し、牧畜民は同時にラマ教を信奉している。信仰行事にかかわる衣装、伝統舞踊・音楽も神秘的で民族的な特徴が強い。古来から手工業としてのシラカバの樹皮を加工した工芸品が知られている。達斡爾族はモンゴル系の民族であり、古代から牧畜、農耕、狩猟、漁業などに従事した。

さて、鄂温克族の歴史資料が乏しいため、民族の由来について各説がある。「ソロン」という呼称について『清実録蒙古史史料抄』に記載がある。記録によるとソロン族は当初エヴェンキ族（鄂温克族）、オロチョン族（鄂倫春族）、ダウール族（達斡爾族）の総称である。1958年にツングース部族、ソロン部族、エヴェンキシロ部族に統一し、鄂温克族と称されるようになった。<sup>4)</sup>

## 2.2 鄂温克族の生活環境について

鄂温克は「山林に住む人々」という意味である。元の時代からシベリア・バイカル湖以東と黒龍江上流・大興安嶺の森林、サハリン島周辺地域で暮らし、漁業・狩猟に従事し、トナカイを飼育していた。清朝の時、多くの漢民族が東北地方に移民したため、鄂温克族は漢民族をはじめ、周囲の少数民族と政治、文化、経済面において密接な関係を築き、その影響で政治制度と生産力が著しく向上した。十七世紀、シベリアの鄂温克族はロシア帝国領内に移動し、大興安嶺の鄂温克族は清朝の領内に残ったため、二つに分割された。鄂温克族は現在に至って猟や牧畜を主に営んで生活し、各種の野生動物の皮を売って生活している部族も残っている。言語や宗教、芸術面などでアイヌ民族との文化類似性が指摘されている。<sup>5)</sup>

現在、鄂温克族は主に呼倫貝爾市の查巴奇鄂温克族郷、得力其爾鄂温克族郷、音河達斡爾鄂温克族郷、杜拉爾鄂温克民族郷、巴顔鄂温克民族郷、薩馬街鄂温克民族郷、敖魯古雅鄂温克民族郷、興旺鄂温克族郷、陳巴爾虎旗鄂温克民族蘇木などの地域で多民族と居住している。広く分散していることと、少人数が集まって住むのが一つの特徴である。また、中国北方地域に居住している最も人口の少ない狩猟民族として衣食住や芸術と文化にも狩猟民族の特徴が大いに現れている。現在中国北方地域に居住している鄂温克族の多くの人が遊牧生活から牧畜業を営む形式に定着したが、食生活や服飾、習慣、風俗など伝統的な部分が残っているものの、集落社会の衰退とともに喪失しつつある。鄂温克族の信奉には自然神が多く存在している。現在でもシャーマニズム信仰が盛んで、あらゆる自然神とものの神を奉ずる。例えばswookといった先祖神やojoor（氏神）、togbokkan（火の神）、bainatya（山の神）というような神などがある。しかし、かつての中国の政治運動や政策などによって、民族宗教は迷信として批判され、

<sup>3)</sup> 呼倫貝爾人民政府ホームページ <http://www.hlbe.gov.cn/>（2017年12月閲覧）

<sup>4)</sup> 『清実録蒙古史史料抄』（2001）内モンゴル大学出版社

<sup>5)</sup> 牧瀬三郎（1940）『ソロン族の社会』生活社

宗教活動が禁止された。1980年代後半からシャーマンなどが復活しつつあるとはいえ、一部の貴重な民族伝統文化が失われたことも現実である。

2013年に中国中央テレビのドキュメンタリー番組として犴达罕（2013）「The Last Moose of Aoguluya」が放映された。主人公の維加（WeiJia）は40代の敖魯古雅鄂温克族男性でかつて名高いハンターだった。維加は民族政策が緩和的な八十年代、九十年代が狩猟民族としての鄂温克族の全盛期だったという。九十年代の後半から猟銃の規制が厳しくなり、殆どの猟師が猟に出られなかったため、余儀なく他の職業に転職される。維加は猟銃を取られて政府への不満をこぼした。「狩猟民族は狩猟ができないと自己文化を喪失することになる。その民族のすべてを失っていき、民族の消滅に直面することになる。その民族の発展と継承がない」と狩猟文化がなくなった苦痛を訴える。維加は高度アルコール依存症であったため、故郷から離れ、都会で治療を受けた。同集落の8人の猟師も狩猟ができなくなってから毎日お酒に溺れ、残り6人もアルコール依存症、亡くなった人もいるという。

維加が暮らした地域の鄂温克族は三集落があり、九十年代の後半に古来の居住であるテントのシーロンツェー中国語で「撮羅子」から集合住宅に移り、交流も中国語、モンゴル語、鄂温克語と達斡爾語の混合語だった。彼は狩猟文化への憧れと思ふ気持ちを隠さなかった。

現在、鄂温克族は漢民族化とモンゴル族化がますます進んでおり、その変化は食文化からも見られる。例えば、今回の訪問先は漢民族の主食である饅頭が主食とし、ナイフを使用せず箸を使用するのが一般的である。その他、テレビ番組も中国語とモンゴル語が主となり、テレビやインターネットが民族語に与えた影響は大きいと考える。多くの人は前世紀八十年代の後半から森の集落から政府が用意した新居に引っ越し、生活の便利さ、現代化が進んでいるものの、自民族の伝統文化の衰退が進む。

## 2. 3 言語状況について

鄂温克族の言語はアルタイ語属の一支派のツングース系の言語に属すると言われ、極少言語である。使用人口が少ないことと居住が分散しているため、UNESCO（2009）の危機言語地図によれば鄂温克語は不安定状態の脆弱レベルの4級だと認識される。

鄂温克語は9個の母音と18個の子音があり、両方長短音がある。発話する際、ジェスチャーが多いという印象を見受ける。現在、鄂温克族は輝河、莫尔格勒、敖魯古雅の周辺地域の3つの方言を使っており、公用語はモンゴル語と漢語になる。鄂温克語に漢語、モンゴル語の語彙を借用するため、これらの言葉も多く融合されている。放牧地区での公用語はモンゴル語で、農業地区と山岳地帯での公用語は漢語が多い。

輝河（Huihe）方言というのはかつて「ソロン語」と称されたものであり、現在呼倫貝地区に分布している鄂温克族のおよそ九割がこの種の言葉を使っている。莫尔格勒（Morqele）方言というのは「ツングース語」と言われたものであり、使用する鄂温克族は約8%で主に陳巴爾虎旗地区に暮らしている。その他、約1.2%の鄂温克族が敖魯古雅（Orgya）方言を現在でも使っており、主に呼倫貝の北部にある敖魯古雅鄂温克族民族郷に集中している。三つの方言の区別は主に発音であり、文法的な差は少ないとみられる。

牧畜地区ではモンゴル文字を用いて筆記記録することが多いが、農耕地区や森林地区では漢字を用いる。語学研究資料及び教科書においては国際音声記号や中国が定めたラテン文字（ピンイン）の転写法が使用されている。一方、ロシアにおいては1930年から1931年にかけて鄂温克語のラテン文字転写を始め、1936年以後キリル文字転写に改められた。

しかし、鄂温克族の言語テキストなどがあるものの、鄂温克族は自民族の文字を有しないため、他の資料につい

ては口頭伝承は民族歴史、文化、さまざまなでき事などを後世に伝達する最も重要な手段とされている。特に伝説、神話、物語、シャーマンの詩などさまざまな形を用いて歴史を後世に伝え、その中、シャーマンは重要な役割を担ってきた。さらに多くの規則や戒律、教典は説教形式で引き継いできた。

鄂温克族の言語研究について約前世紀から注目された。主にロシアの言語学者と日本の言語学者によるものである。十九世紀にロシアのM.Alexanderが中国北方地域の鄂温克族の言語状況を調査し、『ツングース語語法教科書』を完成した。1940年に日本人学者上牧瀬三郎が『ソロン族の社会』がソロン語とモンゴル語の語法形態について比較し、現在のツングース言語研究の第一次資料となっている。また、福田昆之の『日本語とツングース語』は、言語の音韻と語彙体系について研究がなされていて、津曲敏郎の「ツングース諸語の記述的・類型的研究」、風間伸次郎の「ソロン語基本例文集」もソロン語・ツングース語研究の基調となっている。その他、中国、アメリカ、フィンランド、韓国などの言語学者からも鄂温克語の音韻、語彙、語法、方言などについて全面的かつ系統的な成果が挙げられる。これらの研究は主に鄂温克語に関する言語的な記録資料として後世に継承し、有効に活用できると思われる。さらに近年、鄂温克族出身の民族研究者も自民族の言語・文化の保護意識が高くなり、鄂温克族文化の伝承と発展の戦力になろう。

現在、資料は概して他国言語で記録したものの、鄂温克人自身がそれをどの程度に重視し、次世代に伝承させていくのかの課題が残っている。特に現代中国経済の発展の衝撃を受け、次世代への継承が難しくなり、民族の固有言語の消滅危機に迫られている中、学校教育、家庭教育に対する再検討が否応なしに迫られている。

### 3. 学校における民族教育と言語教育の現状について

周知のように中国の少数民族の民族政策と民族教育は特別措置が講じられている。海外から中国の少数民族政策が優れているという評価も少なくない。民族的マイノリティー権利保障において歴史・文化の継承、民族言語の使用などの民族教育が最も根本的な要素であるが、中国の少数民族教育は多様性かつ複雑性があり、中央政府と地方政府の重視度の差異、少数民族の中でも多人数の民族と少人数の民族の差異、地域と経済的な差異が大きい。これらの差異による教育の格差が生じる。

中華人民共和国が成立以後、「民族平等」という基本原則のもとで少数民族教育政策が導入され、少数民族を対象としたさまざまな優遇政策と特別措置がとられた。こうした中で少数民族地域にも学校教育、義務教育制度が実施されてきた。特に少数民族優遇政策としての「民族区域自治法」に民族学院の創立、小中高校の民族班の設立、学生定員の配分、入学試験の優遇制度が設けられている。

さて、2016年9月に内モンゴル自治区第十二回人民代表大会常務委員会の第二十六回会議に『内モンゴル自治区民族教育条例』が可決された。条例に内モンゴル自治区の各種類の民族学校において「自民族の言語・文字あるいは自民族の通用言語を用いて教学しなければならない」と明記した。また、「教育負担が大きい地域や教育状況が困難な地域に適正な特定項目の補助金を設ける」と記される。条例の「各級各級の民族教育機構」は少数民族公民を教育対象とする民族幼稚園、民族小中高校、民族職業学校、高等学校（大学）などの教育機関を指す。その上、「少数民族が密集地区に独立民族教育機構の設立、散在地区では多民族教育機構に少数民族言語文字クラスを開設が必要」と記している。この条例には人口の多いモンゴル族と朝鮮族に対して手厚く対応するではないかという印象が強い。その他、少数民族の言語・文字もしくは民族通用言語の教学や民族伝統文化の教育課程なども条例に盛り込まれた。しかし、モンゴル族と対比すると三少民族（最も人口の少ない三民族）について「鄂温克族、鄂倫春族、達斡爾族は学校教育形式で自民族の言語と伝統文化を伝承する」と書き留める程度であった。

民族言語教育について「義務教育において自民族言語と漢語に対して応用、熟練しなければならない。『中国少数民族漢語レベル試験』制度も同時に実施する」と強調した。

全国大学入学試験においてモンゴル族、鄂温克族、鄂倫春族、達斡爾族の受験生に加点優遇制度や優先採用制度が設けられる。要するに大学試験の特別枠の一種類になる。一方、内モンゴル自治区の大学に限定されることや漢語とモンゴル語で試験を受けるなどのハンディが大きいと思われる。その他、モンゴル自治区内の条件が備えている大学に対して鄂温克族、鄂倫春族、達斡爾族の受験生に本科に進む準備のための予科教育を呼びかけるが、具体策などは不透明である。これらの優遇措置は一見三少数民族のための制度に見えるが、しかし、大学試験を受けるのに漢語やモンゴル語で受けなければならないという現実が待ち受ける。このように、実際、高校と大学進学を希望する少数民族の子どもたちは受験制度の壁の前に進路が制約され、多くの進学断念者が存在することを直視すべきである。

条例の第二十六条に「健全な民族教育に適する具体的な双語（二言語）教育システムを導入し、モンゴル語の教材開発や専門的な編集チームの設立、国家レベルの教材編纂、地域の特色のある教科書の開発などに力を入れる」と具体策を立てる。その他、さらに具体的にモンゴル語の小中高校の教材、資料及び教学資源の開発、発行などについて中長期計画を強化した。条例に民族言語の専門教員についても触れた。ここにも「モンゴル語と漢語の二言語でできる教員養成や待遇、報酬優遇などについて保障する。」と記す。また、「自治区の財政予算も逐年増加する。」と具体性と政策の積極性がみられる。

また、条例の第三十九条に少数民族学生の助成金制度を完備し、その財源を自治区、盟市、旗県地域で三級分担制にする。二言語教学の民族幼稚園において幼児保育費の減免の補助金は地方財政から負担し、二言語教育の小学校においての学費・教材費免除、寄宿生への生活補助費などの負担は自治区の財政から補填すると定めている。

岡本（1999）は「こうした積極的な政策を推進の中で、政府を悩ませるさまざまな問題が生じる。」と指摘する。<sup>6)</sup>それは漢民族が少数民族の優遇政策を不正利用しようとする身分の偽造や少数民族自身が消極的な態度、各地域行政の政策に対する理解度と実施状況、地域の経済状況、各家庭の事情などさまざまなギャップによる現実と政策・制度のずれが生じるものがある。

2017年のデータによると中国高等学校（大学）は2914校、そのうち普通高等学校が2613校（独立学院265校を含む）、社会人高等学校283校がある。しかし、31省の中でも教育資源の分布が不均衡的である。要するに東部の沿岸地域の教育資源が発達されていて、そのうち最も大学が多い地域は江蘇省であり167校の大学がある。それに対して西部地区の教育資源は欠乏、その中、チベット自治区が7校で最も少ない。内モンゴル自治区に53校がある。<sup>7)</sup>小中高校はおよそ1万7000校があり、そのうち民族学校（もしくは民族学級、クラス）は512校ある。だが、この数字は〇〇民族学校と称するものが多く、むしろ少数民族の学生に対する優遇措置はあるものの、実際在籍している学生の多くは漢民族とモンゴル族で、純粋な少数民族学校の数は不明であることが調査で分かった。

呼倫貝爾市鄂温克旗に小学校10校、在校生合計約5000人、中学校11校、在校生合計約3000人、中学校の高校部に合計約1500人の学生が在籍している。今回、民族学校として歴史が長い鄂温克旗第一実験小学校と鄂温克中学校を訪れた。小学校に約600人の学生が在籍し、200人ほどが鄂温克族で約300人がモンゴル族だった。中学校は寄宿制の学校では約800人の学生が在籍しており、約200人が鄂温克族である。教員も150人のうち20人が鄂

<sup>6)</sup> 岡本雅亨（1999）『中国の少数民族教育と言語政策』 社会評論社

<sup>7)</sup> 中国大学試験ホームページ <http://www.gaokao.com/>（2018年閲覧）

<sup>8)</sup> 鄂温克族人民政府ホームページ <http://www.ewenke.gov.cn/>（2017年8月閲覧）

温克族だった。<sup>8)</sup> 小学校において一年生からすべての科目をモンゴル語で授業を行い、三年生から漢語の「語文」(国語)一科目のみを加える。

子どもたちのモンゴル語の流暢さに筆者は驚嘆するほどのレベルであった。その修得度も母語である鄂温克語の数段上のようにみえる。

さて、いったい子どもたちはどこで母語を使用するのか。最も母語を使用する場所は家庭の中であると教員との談話で分かった。多くの鄂温克族は他民族と通婚しないことも伝統文化が継承できた一つの要素である。また、町以外の疎外地域の鄂温克族は大家族で暮らしていることが多い。中学入学まで家庭の中で日常会話は、祖父母あるいは父母と鄂温克語、もしくは2割程度のモンゴル語を使用されている。しかし、子どもたちにとって最も身近なものである絵本や児童書、ゲーム、テレビ番組などは漢語とモンゴル語のみである。中学になると多くの子どもは寄宿制学校に入学する。ここから鄂温克語を使用する時間が一気に減少し、およそ9割モンゴル語を使用する。両親とチャットする際もモンゴル語が増えていると学校の関係者から伺った。その他、家族構成により家庭内の用語も変わる。達斡爾族とモンゴル族と通婚した家庭ではさらに鄂温克語の使用率が低下する。義務教育を終え、高校・大学進学する予定の子どもは進路の道が狭くなるため、難関校を目指せば目指すほど、漢語、モンゴル語、英語が必要となる。特に自治区外の大学を希望する子どもは学力と英語力を備えなければならないことからますます自民族言語と離れていくのが現状である。

鄂温克旗第一実験小学校と鄂温克中学校の9割の学生がスマートフォンを持参していた。しかも、子どもたちはアプリケーションを使いこなしているという印象を受けた。子どもたちの学習言語、生活言語はモンゴル語が主要言語であるが、それ以外のもの、書籍、漫画、テレビ、ゲーム、歌などは7割漢語で圧倒的に優位である。今回の座談会において教育関係者と父兄らは「2010年まで鄂温克語の使用率がもう少し多かった。インターネットとテレビの影響は多大である」と異口同音にいう。「現代通信の影響は将来鄂温克族の言語・文化の継承に利用することも可能性もあるが、喪失していく恐れもある。これは避けられないものだ」と不安を吐露した。

さて、調査した民族学校の教員は全員専科大学あるいは本科大学(四年生大学)の学位を有するものであった。教員自身もモンゴル語と漢語のバイリンガル教育を受けてきた人が多いが、鄂温克族出身の教員でも自民族語を流暢に操る人はいなかった。さらに親の学歴が高いほど、家庭の経済状況がよいほど漢語、英語などを重視する傾向が強いと思われる。今回一人の鄂温克族の女子大学生と接する機会があった。彼女は名門大学である西安政法大学の法学部の2年生だった。両親は農園の経営者で鄂温克族のなかでも成功者であると思われる。幼い頃から漢民族の私立幼稚園に通い、小学校から両親彼女のために購入した山東省威海市にある別荘で暮らし、現地の名門校に通った。威海市に戸籍がないため、地元の子どもより三倍の学費を納めたという。彼女は「自分は決して特例ではない。威海市の別荘の周辺に受験するために多くの鄂温克族、鄂倫春族、達斡爾族、モンゴル族の富裕層の子どもたちが暮らしている」と明かしてくれた。彼女の鄂温克語は日常会話程度の聴解力があるものの、話すことはできない。父親は50代で生活言語ができるが、殆ど使う環境がないという。彼女も両親も「民族語と民族文化が大切だと思うが、もっと大きな世界で羽ばたきたい。グローバル的な人間になりたい。私たちに矛盾はない。以後余裕ができたなら民族語を学びたい。」と心境を明かしたが、母親は「そんな時間があれば英語に力を入れなさい」と側でつぶやいた。

鄂温克語の簡易教材も開発されたことも一定の効果があるものの、種類はまだ少ない。それに他の読み物が少ないため、子どもたちの関心が低いのも現状である。

#### 4. おわりに

今回の調査対象とした北方地域の無文字三少数民族は新疆自治区、チベット自治区などの人数の多い民族に比べ、複雑な歴史と政治的な背景が少ないため、他の少数民族と同様に扱うことができない。「民族力」や政府からの政策、待遇、補助金、各支援なども大差がある。例えば政府が提唱する「双語教育」については三少数民族にとっては二言語教育という学校教育の以外に、生活言語として第三言語、第四言語が存在している。実際、一つの言語を修得し、熟練を要するまで時間と精力が必要とされる。その上、中国全土に漢語を話す少数民族がますます増大する傾向がみられ、それは政府の国家統合政策としての「双語教育」に重点が置かれたことの影響が大きいと言えよう。その他、社会要素、経済要素、国際化の進行などの要因も大きな影響があるとみनाす。家族と子どもたちは「少数民族の地域であることや、経済の格差は負の連鎖になる。その格差をなくそうとするには漢語が大きな戦力になる。これは他の少数民族も同じで、ずっと前からだ。」とこのように認識している。

2017年に呼倫貝爾で少数民族の子どもとその周辺を調査した際、日本のマイノリティーと中国のマイノリティーとの学校教育と家庭教育において共通点があると判明した。例えば経済の発達地域と経済状況の良い家庭ほど民族意識が低下する傾向が強いとみられる。一方、日本のマイノリティーの子どもたちは日常の生活様式は「外国式」であるが、人前で母語を話すのに抵抗感を持つ子どもが多く、外国籍であることに対して周囲の人々の反応を敏感に感じる。中国の少数民族の子どもたちは幼い頃から多民族環境におかれ、民族語、少数民族に対してコンプレックスを感じていない。

さらに、年少者の母語（自民族言語）の使用頻度が高く、修得度も高いが、社会進出するにつれてそのレベルが低下していくことも日本と同じ状況である。それは歴史的、政治的、社会的な理由による母語力の低下あるいは消滅するものである。

現在、鄂温克族は多文化・多言語の環境におかれ、使用言語もモンゴル語、漢語、鄂温克語、達斡爾語など混在言語となっている。鄂温克語の使用範囲が狭く、自民族言語の弱体化になっていることが明らかである。しかしながら3万人の弱小民族とみられる鄂温克族は民族大移動、コミュニティ構造の変容、他言語接触、生活様式の変化などの多くの歴史的な変動を受け、長期にわたり漢民族、モンゴル族、達斡爾族と雑居、多言語の混合状況に置かれた中で自民族の言語と伝統文化を維持してきた。しかし、世紀転換期において生活環境と社会が急速に変化していくと同時に風俗習慣、民族族文化及び価値観が変容しつつあることも明らかである。民族言語と伝統文化の継承は次世代の民族アイデンティティー形成に大きな影響を与える。世紀転換期は民族文化の移行の過渡期でもあり、多くの課題が残っている。言語教育は民族文化の継承と相互作用するものであり、民族文化の伝承の再構築及び発展につながる。

アイデンティティーは不可変的なものではない。グローバリゼーションとトランスナショナル化が急速に進行している中、佐藤（2001）は「特定のナショナリティから切り離された新しいナショナリティを獲得した人間は、母国の文化とその居住地の文化とも違った『ハイブリッド (hybrid)』なアイデンティティーを獲得する。『ハイブリッド』なアイデンティティーとは、国家の枠組みに揺られた結果から新たにできたアイデンティティーである。」と指摘する<sup>9)</sup>

特に現代社会において複雑な言語環境、社会環境におかれている人はその傾向が一層強くなる。少数民族の子ども

<sup>9)</sup> 佐藤郡衛（2001）『国際理解教育多文化共生の学校作り』明石書店 pp.31-32



もたちのアイデンティティーも「単」から「多」、「マイナス性」から「プラス性」の転換の構築・確立を目指すことが可能である。多様な言語、文化、価値観を身につけ、民族、国籍を越えて、豊かな独自の文化を創出することは可能であろう。

本調査は諸要因により得られたデータに浅い部分もある。今後の研究にはより更に長い期間に渡って、より深く、多くの調査研究や観察が必要となる。

#### 参考文献 (References)

- 中華人民共和国教育部編2002『全国教育事業第十個五年計画』人民教育出版社
- 牧瀬三郎 (1940) 『ソロン族の社会』 生活社
- 福田昆之 (1989) 『日本語とツングース語』 FLL 出版社
- 岡本雅亨 (1999) 『中国の少数民族教育と言語政策』 社会評論社
- 小川佳万 (2001) 『社会主義中国における少数民族教育』 東信堂
- 桂木隆夫 (2003) 「社会主義、言語権、言語政策」『ことばと共生』 三元社
- 植田晃次・山下仁編著 (2006) 『「共生」の内実』 三元社
- 崔淑芬 (2012) 『中国少数民族の文化と教育』 中国書店
- 大西広 編集 (2012) 『中国少数民族問題と経済格差』 京都大学学術出版会